

## 8-04 オアズマンシップ

エバールフォント(Migu1c)×16pt 版、2018-8-13 作成

### 1 オアズマンシップ

オアズマンシップとは本来は、ボートを操る「技術」のことです。しかしスポーツマンシップと同様の精神的な意味合いで用いられてきました。ルール、マナーを守り、競漕相手に敬意を持って行動するフェアプレイの精神、ベストをつくすこと、チームワークそういったものです。

### 2 ロウアウト精神

ロウアウト精神とは、レースの最後の瞬間まで全力で漕ぎ尽くし、果てようとする姿勢のことです。「全力を尽くさないことは、全力で競おうと練習してきた競漕相手に対し失礼だ」とも言えます。

### 3 一艇ありて一人なし

「一艇ありて一人なし」という言葉もあります。「一つのボートを漕ぐクルーにはばらばらの個人はなく、一心同体だ」との意味で使われます。しかし、動作を一つにしての競漕は、きれいごとではなく、苦しくて漕ぎやめたくてもやめるわけにいかない、機械の歯車のようになることです。しかし強制ではなく、スポーツの中で「自ら進んで」歯車になる体験が、心を鍛えていきます。

別の言い方をすれば、「クルーには、エースもヒーローも要らない」

ということです。スティーブ・レドグレーブは、1984年から連続5個の金メダルを獲得した英国の偉大な漕手です。糖尿病と戦いながら金メダルを得たシドニー五輪の優勝会見で、「競技を終えたら、レースに出た選手全員と互いに健闘をたたえ合いたい。僕はメディアに話をするために競技しているのでは決してない」と話しました。立派な表彰ステージの勝者と敗者のメディアの扱いの落差、それに引きずられる大会運営への苦言でした。レドグレーブが偉大なのは、その金メダルの数によるのではなく、オアズマンシップを本当に理解し、体現しているからです。（参考：共同通信社ウェブサイト「シドニー日記」、「五輪選手はみな平等／王者の気骨に触れる」）

#### 4 みんなのためのスポーツ

ボート競技に、「ハードネスに耐えられる限られた人間だけに許されたスポーツ」といったイメージを重ねる人がいます。「選ばれし者」だけのスポーツという言い方もあります。個人のプライドは理解できます。

しかしもし、その発想が、うぬぼれや、「だめなヤツはこのスポーツをする資格はない」といった方向に傾くとしたら、それは大きな間違いです。スポーツとしてのロウイングは、懐が深く、漕ぎたい人の誰もが、ルールとマナーを守りながら、その人なりのできる範囲でできるなりのスタイルで漕げる、そんなスポーツの世界を作るべきです。

自己的なロウイングから、クルー、チームワークへの意識の展開は、さらに拡大すれば、隣人のロウイングを支援する意識になります。